

BOOK REVIEW

エモーショナル・デザイン —微笑を誘うモノたちのために

ドナルド・A・ノーマン著, 岡本明・安村通晃・伊賀聡一郎・上野晶子訳

新曜社 ISBN 4-7885-0921-0 2004年発行

評者：青木 恒（東芝）

本書の著者は日本でも広く名前を知られ、前著「誰のためのデザイン? 認知科学者のデザイン原論(原題 The Psychology of Everyday Things. 以下 POET と略す)」の読者も多いことだろう。電気工学のバックグラウンドを持ち、後にアップル・コンピュータやヒューレット・パッカードにも籍を置いた著者の POET および本書における提言は、プロダクト・デザイナー、とりわけ情報機器のデザイナーや研究者にとって興味深く、少し耳の痛い、そしてタイムリーな示唆であった。この10年ほどの間に、「機能追加こそが付加価値」であった情報機器の潮流がまるで夢から覚めるようにスローダウンし、一部のパワーユーザだけをターゲットにしていたのでは市場の飽和が見え始めてきたことも POET や本書が求められる時代の要請と言える。

POET では「ユーザ中心のデザイン」として、今では基本となったとも言える設計原則を提言する一方、実際の利用シーンを無視した機能満載で、そしてそれがゆえに却って使いやすさを棄ててしまった「悪い」製品事例を小気味良く紹介しながら論理を展開した。それに対し本書は、なるほど手に取ってみたいと思う「魅力的な」製品や研究事例に彩られており、それらがどこで手に入るのかと、読み終わった後にネット検索したくなるほどである。それはつまり、本書が「使いやすさ」だけではなく、製品が人間に呼び起こす情動的感受も製品の善し悪しを決定づけている重要な要素であると主張しているからに他ならない。本書では直接的には何の機能も持たない土産物や、一見して何に使うかわからない台所用品も優れたデザインとして例示されている。POET の読者には、機能の可視性が重要であると説いた前著との整合性に困惑する向きもあるかもしれない。しかし本書で著者はデザインがターゲットとすべきレベルを

脳機能のそれに対応づけた「本能」「行動」「内省」の三つに定義し、前著のような操作のわかりやすさや性能は「行動的デザイン」に織り込まれている。そうした行動的魅力に、「かわいい」「美しい」「愉快だ」のように五感に訴えかける外観の本能的魅力、そして製品を所有したりサービスに関与したりすることによってユーザの中に生まれる自己イメージや満足感、想い出といった内省的魅力を加え、著者はデザインがもたらす価値を情動(emotion)のフィールドへと拡張している。

魅力的な製品やサービスが与えるポジティブな情動は人間の好感や創造的な思考を促し、ネガティブな情動はフラストレーションを与える。本書の後半はロボットにスポットを当て、自律的に行動するこれからのロボットにも人間同様、情動が必要であると著者は説く。例えば純粋に論理的な思考では解決できないデッドロック状態もフラストレーションを感じるという情動機能をロボットに持たせることで解決できるのではないか。

未来のロボットにとっての情動とは、そうした自律行動制御の他にも外観や動作を通じて人間にポジティブな情動を与えるためのものや、自己の状態を人間に提示するためのものになるだろうと提言して本書は結ばれる。情報機器にせよロボットにせよ、ユーザに適應して出力を変化させる自由度を持ったものであり、情動的価値提供を追求する研究や設計の可能性を十分に持っていると言える。ここに同分野の課題へのアプローチが示されている。

いずれにせよ、もし読者が本書を書棚に置き、本書を持っていることや読書体験を自慢げに家族や友人に話したい衝動に駆られたとすれば、本書自身も読者に情動的な価値を与え、著者の例証の一つとなっているとも言えるだろう。

